

保育者養成校に通う学生の職業選択要因について

阿部 直美・村井 尚子

1. 研究目的

保育者養成校に通う学生は、入学時に保育職への一定の理解と職業観を持って入学し、養成校での教育を経て、保育職へ就職する。つまり入学した時から保育職に就職するというゴールに向かって学びを進め、「保育職とは」「保育職を選んで良かったか」「自分にむいているのか」を自身に問いかけ、他の選択肢を考えたり、迷うための十分な時間を費やさないまま、職業選択を迫られる場合も多いと考えられる。加えて保育者には、少子化や核家族化、親準備性の欠如、地域コミュニティの崩壊等、昨今の社会情勢の変化に伴い、子どもの保育に留まらず、家庭支援等社会的な役割も求められ、保育者としての高い専門性と職業観が望まれている。この高い専門性と日々の業務により、保育者は大きなストレスを抱えることもあり、子どもの教育を担う専門職である保育者の高い離職率や保育者不足は大変深刻な状況である。

保育者としてその専門性を高め、長く保育職に携わる意欲を育てていくためには、養成校としてどのような教育が望まれるのか。「保育者効力感」つまり「保育場面において子どもの望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」は、保育者が保育職を長期間取り組んでいく上で重要である（三木・桜井，1998）とある。そして、この「保育者効力感」を高める要因として（小河・長屋，2015）によると、「職業認知」つまり「保育職の理解」と「保育職の適性感」が挙げられ、「学生が自分が保育という職業を理解できており、良い保育者になるために何をすべきか理解できていると感じるほど、また保育士という職業が自分の適正に合致し、自分の能力を活かせる職業であると感じるほど、保育効力感が高まる」とある。

本研究において、保育者養成校に通う学生は、どのような思いで養成校に入学し、保育職への就職を決めるのか、また就職への期待や不安、将来性への認識等についての意識調査を実施し、学生は養成校での学びを通して「保育職の理解」や「保育職の適性感」等、どこまで「職業認知」を得ることができるのか、また「保育者効力感」を高めていくことに繋がっているのかについて検証するとともに、保育者養成校において行うべき学生教育のあり方について考察していきたい。

2. 研究方法

- (1)調査対象 4年制大学242名（1回生127名4回生115名）
- (2)調査期間 2017年8月～2017年12月
- (3)調査内容 無記名アンケート調査を実施

アンケート調査内容はおもに以下5項目に分けられる。

- ①保育者養成校への進学を決めた理由
- ②保育職（保育所保育士・幼稚園教諭・施設保育士・小学校教諭・認定こども園保育教諭）を希望就職先に選択した理由
- ③就職に際して、不安なこと、楽しみなこと
- ④保育職を何年位続けるか その理由
- ⑤保育職を選択しなかった理由

以上の結果を分析・考察する。

3. 結果と考察

①保育者・教師をめざした時期

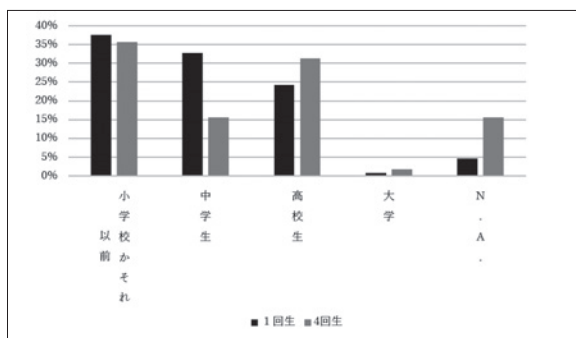


図1 保育者・教師をめざした時期

1回生・4回生共に、小学校かそれ以前の時期に保育者・教師を目指したと答えている割合が最も多い。影響を与えた人物としては、「幼稚園・保育所・小学校の先生」を挙げる学生が最も多く、自身の保育体験からの保育者に対する良いイメージによるものと考えられる。また幼稚園の先生の影響を受け幼稚園の先生を、小学校の先生の影響を受け小学校

の先生を希望する学生も多く、出会った保育者の影響がとても大きいことがわかる。次いで「家族（母・父・兄弟姉妹・従妹）」「中学・高校・顧問の先生」が多かった。

②保育者養成校に進学を決めた理由

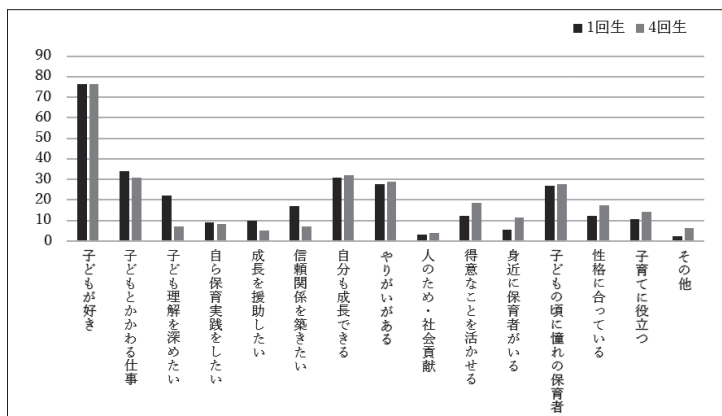


図2 保育者養成校に進学を決めた理由

養成校への進学理由として最も多かったのは、「子どもが好き」であり、1回生・4回生に大きな差はみられなかった。「子どもとのかかわり」「自分も成長できる」「やりがいがある」「子どもの頃に憧れの保育者」を選択する学生も多く、保育職に対して良いイメージを持っており、前述の通り保育

者への憧れによる選択数も多い。1回生において多い項目として、「子ども理解を深めたい」「信頼関係を築きたい」等、保育職への一定の理解や職業観に基づいた興味や関心が見受けられる。これら子どもに対する興味や関心は、自身の目的意識を高め学習意欲に繋がるものであり、養成校においてはこの気持ちを失わず、より高めていけるような養成校での学びが望まれる。4回生は、「得意なことを活かしたい」「身近に保育者がいる」「性格に合っている」「子育てに役立つ」が、1回生に比べて少し多かった程度である。

③就職先に保育職・教師を選んだ理由

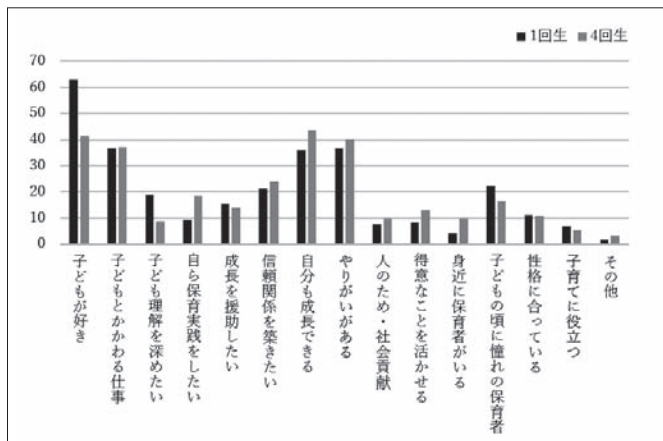


図3 就職先に保育職・教師を選んだ理由

就職選択理由として、1回生は就職がまだ先のことであるということもあり、前述の進学理由と同じく「子どもが好き」「子ども理解を深めたい」という理由が多い。4回生になると「自分も成長できる」「自ら保育実践したい」という理由が増えている。

④進学と就職の理由の関係（クロス集計）

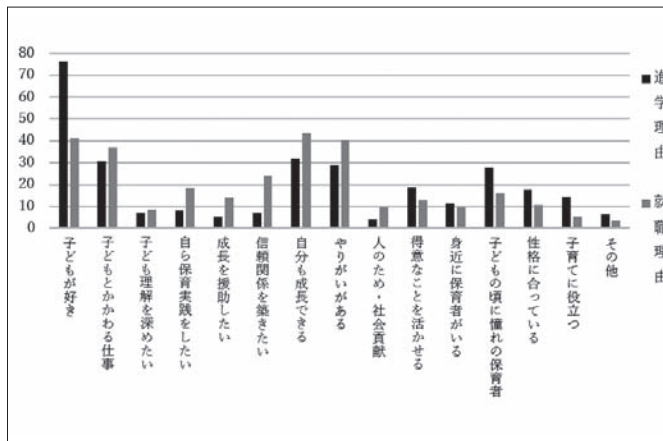


図4 進学と就職の理由の関係

進学と就職のクロス集計をみると、進学理由として最も多かった「子どもが好き」が激減している（35ポイント減）。これは学生の話でしばしば聞かれる「子どもが好きだけではこの仕事は務まらない」からも推察されるところであるが、学生の養成校における日々の学びと実習やボランティア等の体験活動によるものと考えられる。

同時に就職理由として増えているのは、

「自ら保育実践したい」「成長を援助したい」「信頼関係を築きたい」「自分も成長できる」「やりがいがある」であり、就職活動中である4回生においては、自らの保育実践をイメージした具体的な事項となっている。いわば養成校での学びを通して、「保育職への適性感」「保育職の理解」等保育職への一定の理解が深まり、就職への選択理由に繋がっていると考えられる。

⑤仕事に就くにあたっての不安

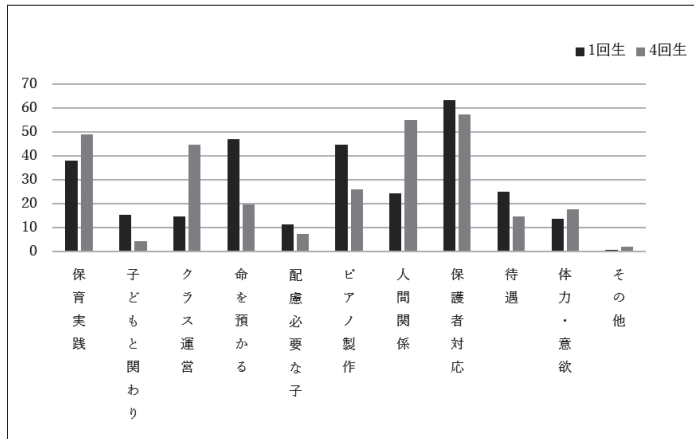


図5 仕事につくにあたっての不安

4回生は、「クラス運営」「人間関係」「保育実践」に不安と答える割合が多い。就職を目前に控え、自身が保育者となり実際に子どもの前で保育を行う姿を想像し、イメージを持って回答していることがわかる。

1回生は、「子どもとのかかわり」「命を預かる」「ピアノや製作」「待遇」に不安と答えている。自身の現時点での苦手ことや保育職として一

般的に認識されていることに対する不安感への回答が多いと考えられる。また1回生・4回生共に「保護者対応」が非常に多く、複数回答のため100%を超えている状況である。昨今新聞やニュース等においても、一部の保護者の身勝手な言動について報じられることも多く、社会での関心も高い。若い学生にとって自分より年上である保護者に対する対応に不安感を持つことは容易に考えられる。しかし保育者・教師として、保護者との信頼関係を築き、日々のコミュニケーションを通して良好な関係を構築していくことは、子どもの成長を支えるために言うまでもなく重要である。保護者とのかかわりの大切さを知らせ、保護者に対して悪いイメージの先入観を持ち過ぎず、保護者対応力を保育者の資質として身につけていく養成校での学びが望まれる。人間関係が希薄になっている昨今、学生は幅広い世代や色々な考え方を持った人々とのかかわりの機会を多く持ち、広い社会に目を向け、ボランティア等の体験活動を行ったり、学びや研究を深めるフィールドワークを積極的行ったりすることも大切である。

⑥いつまで働くつもりであるか

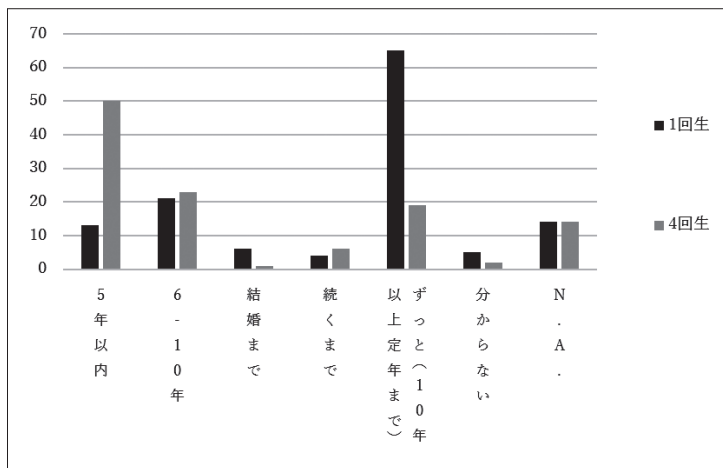


図6 いつまで働くつもりであるか

専門職である保育者として、1回生は「ずっと（10年以上定年まで）」働こうと考えている割合が最も多く50.8%に対して、4回生は、「5年未満」が43.5%、「6～10年」が12.2%、合わせると55.7%が10年以内に辞めようと考えている。つまり1回生の時には長く働こうと考えている学生が半数いるが、4回生では半数以上が10年

以内に辞めようと考えていることがわかる。

特筆すべきは、4年間の学びを通して、学生の「保育職への理解」や「保育職への適性感」が進み就職を決めている反面、保育職で働きたい期間が、1回生と比べ4回生は極端に短くなっていることである。つまり養成校での学びや経験を重ねることで、学生は保育職を長く続けることはできないと考えるようになることがわかるのである。なぜ学生が保育職を続けたいと考える期間が短くなったのか、学生の不安感データから考えたい。

⑦ 5年未満と10年以上の不安の違い（クロス集計）

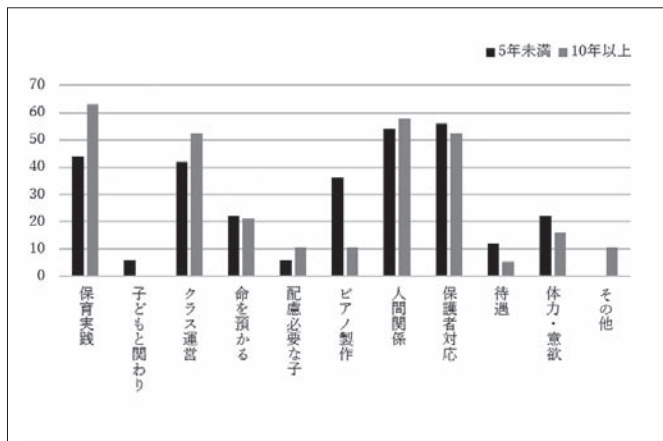


図7 5年未満と10年以上の不安の違い

働きたい年数が、5年未満と10年以上どちらの学生も、「子どもとの関わり」に不安感は殆ど見られないが、前述の通り、「保護者対応」についてはどちらも高い不安感を持っていることがわかる。

10年以上続けるつもりの4回生は、5年未満の学生と比べて「保育実践」「クラス運営」「人間関係」に高い不安を感じている。5年未満の学生の10年

以上の学生と比べた高い不安感とは、「ピアノ製作」「待遇」「体力・意欲」である。

なぜ保育職・教育職を長く続けたいと思えないのか、5年未満の学生の不安を考察すると、まず「ピアノ製作」が挙げられる。これは自身の苦手なこと、嫌いなことに対して、自信が持てず不安であることによると考えられる。養成校では、音楽系の科目や図工系の科目も多く、学生はこれらの授業を通して上達や修得が見込まれる反面、苦手意識が高まっていくことが考えられる。「私はピアノが苦手なので〇〇への就職は無理」と決めている学生もいる。現状養成校の教員間でも、また保育現場でも、ピアノや製作を保育者の必須条件と考えているかどうかには、温度差もある。保育者が様々な保育技術を有していることは魅力であるが、これは一つの手段であり、保育者の資質に繋がる全てではないと考える。本来必要な保育者としての資質を有するにもかかわらず、苦手なことへの負担感が意欲喪失に繋がることは残念である。「保育者効力感」を持った「専門性の高い保育者とは」を教員間においても意見交換を行い、養成校での学びについて一考すべき課題である。

また、早い時期から保育者への憧れと期待を持ち「子どもが好き」で、「子どもとのかわり」を楽しみに職業選択を考え入学した学生が、何故この気持ちを持ち続けることができずに「体力」の限界を感じ、「意欲」が続かないと考えるのか。保育職は前述の通り激務であり、学生は実習やボランティア活動等を通して、保育者の日々の忙しい勤務の様

子を目の当たりにすることになる。また保育者には様々なニーズが求められる中、現職保育者の現状として、平均勤続年数は、幼稚園教諭10.3年（私立幼稚園9.6年 公立幼稚園14.2年：文部科学省幼児教育の実践の質向上に関する検討会資料 H30.6） 保育士7.6年：厚生労働省保育士等確保対策検討会資料 H27.11）で、勤続年数が7年～10年以下の保育者が約半数である。学生にとっては、自らの10年後のモデルとなる保育者の存在が少なく、イメージとしても描きにくい実情も伺える。学生が保育職を長く続ける保育者の姿を実際に見て、保育者の年齢に応じた保育の特色を実感し、その喜びや魅力を聞くことにより、保育職への意欲の変化に繋がる一助となると思われる。また「待遇」の問題も大きく、幼児教育の無償化や多職種との比較も踏まえて改善が望まれる。現状の仕事をできるようになれば良い、今だけをみつめる保育者ではなく、未来を構築する保育者を育てるために、現状での不足要素を補い、未来を創造できる養成校での学びの試みが望まれる。

次に10年以上働くつもり学生の不安をみると、「保育実践」「クラス運営」が挙げられる。これらは就職して日々の保育経験から学ぶところも大きい。養成段階においては、実習やボランティアの場は貴重である。どんな保育がしたいか、どんな保育が子どもにとって望ましいか、子どもの、保育者のどんな姿に魅力を感じるか、目の前の保育を通して感じ取ることができる数少ない機会である。学生が個々の実習目的や課題を明確に持ち、前向きな姿勢で臨むことができる養成校での学びが重要である。

また実習は、学生が養成校の教員だけでなく、現場の保育者との出会いを通して、自らの保育のビジョンや、将来の自らの保育者像がイメージできる機会でもある。実際に目の前で保育を行い、子どもの絶大な信頼を得ている保育者の行動や言葉の重みはとて大きい。学生は生き生きと子どもと接する保育者の姿をみて、自らの将来像を重ね合わせるのである。そのモデルとなる保育者の存在は大きい。保育者育成を目指し、実習のあり方等について養成校と実習園が意見交換の場を設け、現場と養成校それぞれの思いに気づき、共通理解のうえ、連携を取り、学生指導に取り組んでいくことが重要である。

併せて学生は職場での「人間関係」においても不安感が高いことがわかる。昨今相手を思いやる心や、相手を許す心のゆとりがない人間関係に疑問を感じることもある。教育に携わる人間の資質として、学生には人間関係の基礎をしっかりと学んでほしい。それには学生自らが体験し、人との大切なかわりや人の暖かさや嬉しさを実感できる大学時代を過ごして欲しい。この経験こそが、将来保育者として子どもや保護者と向き合うとき、他の保育者との同僚性に繋がり、過剰な不安感を持たずに保育職に向かう力になる。そしてこのことこそが、保育者の質の向上にも繋がっていくと考える。養成校においては、人間関係の基礎をもう一度見つめ直した教育のあるべき姿を示すことが重要である。

学生にとって「保育職への理解」や「保育職への適性感」を知る「職業認知」は重要であるが、現状の保育職の厳しい側面を踏まえ、学生が不安感を乗り越えることができる養成校としての学びが重要である。同時に学生自身人として認められ、子ども達を深く受け

止めていける保育者としての人間性が培われていくことが大切である。

⑧就職後に楽しみにしていることはどんなことですか（自由記述）

- 子どもと信頼関係を築くこと。子ども達の成長がみられること。
- 子ども達が自分の教育でどれだけ成長し、どれだけ影響を与えられるか楽しみです。
- 実際に担任の先生という立場で子ども達と深くかかわっていけること。
- 子どもと毎日を過ごし、楽しいことも、少し辛いことも一緒に感じる事。
- 自分のクラスを持って、子どもに頼りにされること。
- どんな子どもとかわれるか、毎日どんな出来事があるか楽しみ。
- 「先生」とたくさん呼んでもらえる保育者になり、信頼関係を築いていくことが楽しみです。
- 子ども達と一緒に協力しながら色々なことに挑戦し、成長していきたい。特に子ども達のやってみたいや疑問を少しずつ一緒に解き明かしていきたい。

学生は様々な不安感を持ちながらも、勿論多くの期待感を持って就職する。この期待感こそが、明日からの保育を支える力になるのである。初心を忘れず、期待感を持続できるよう、養成校においては自らが困ったときにどのように取り組み、解決していくかを考え実行していく自己解決能力と、成功体験を数多く積み、決められた解決方法ではなく、一人ひとりの個性を踏まえた能力の育成に務めることが併せて重要である。これらの体験が、負けない気持ちと意欲的な姿勢に繋がると考える。

⑨保育職を就職先として選ばなかった理由を教えてください（自由記述）

- 就職間近になった時、自分には子どもに尊敬されるにはまだまだ早いと感じた為、社会に出てもっと様々な経験を積みたいと思ったため。
- 人を笑顔にすることや、人の役に立つ仕事がしたいと思ったので、企業に決めました。
- 実習してみて、自分に合っていないと思ったので。
- 勉強すればするほど、保育者・教育者の責任の重さを感じ、怖くなってしまった。子どもはとても好きですが、それだけでなるには荷が重すぎると思った。
- 将来一人立ちを考えたとき、体力面や金銭面を思うと不安に思ったから。
- 実習で現場の状態をみてがっかりした。保育の実践が全くできず、保育職に魅力を感じなくなった。

4. まとめ

保育者養成校に通う学生の職業選択要因について、学生アンケート調査を基に分析・考察を進めてきた。結果4年間の養成校での学びを通して学生の「職業認知」が進み、保育職への就職に向けて意欲的な側面がみられたが、同時に「職業認知」が進むことで学生の

不安感が高まり、4回生では保育職を長く続けたいという希望が1回生より大幅に減少していることに衝撃を受けた。保育職は激務で、報酬も低いという現状が認知されている中、人間としての基礎を培う子どもの教育を担う専門家である高い資質を持った保育者を育成することは保育者養成校としての責務である。幼いころからの希望を胸に入学してきた学生が、意欲を失うことなく保育者への道を歩んでいけるよう、養成校としては、コミュニケーション力、自己解決能力の育成や、保育者の専門性を踏まえた教育実現についての検証、実習園との新たな連携関係の構築、人間力を備えた教育のあり方等について検証を行い、有意義な学びへと繋げていきたい。

アンケート最後の保育職に就職しなかった理由についての回答をみると、保育職に対して疑問に思ったり、できないと感じたり、悩んだり、自身の将来について懸命に考えている様子が伺える。これらの気持ちを感じ、悩んだ学生だからこそ、保育者としての魅力を有しているのではないかと感じるものがある。養成校では、一人ひとりの学生の思いや悩みに寄り添い、自らがめざした希望が実現できるような教育を考えていくことが大切である。

引用文献

- ・三木知子・桜井茂男（1998）保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究46 203-211
- ・小河妙子・長屋佐和子（2015）保育士養成課程に在籍する学生の職業認知が保育者効力感に及ぼす影響 名古屋女子大学紀要61（人・社）109-115